

全員での課題達成を目標に 自立した学習集団をつくる

上越教育大大学院学校教育研究科教授 西川純

学び合いについて「何となく大切だと思っっている」「関心がある」——そうした声は多くの先生方から聞かれる。そもそも、学び合いとはどのような教育活動なのか、実践の上で何が大切なのか。学び合いの研究を進める上越教育大大学院の西川純教授に話を聞いた。

日々の授業でこそ 人とかがわる力を育む

中学校教育に求められるのは、社会で生きていくために必要な力の育成です。社会ではさまざまな人が互いにかかりながら生きていくため、日常生活でも仕事でも、自分一人では解決できない問題がたくさんあります。

そうした社会で自立して生きていくためには、自分とは異なる価値観や考え方を持つ人とつながって協力的な関係を築く力、つまり他者と折り合いをつけながら課題を解決する力が欠かせません。教育基本法が第一条で教

育の目的を「人格の完成」と位置付けているのは、このことを指すと考えられます。

こうした力はこれまで、特別活動や部活動で身に付けるものと捉えられがちでした。しかし、生徒が学校で過ごす時間の大半を占める授業の時間にこそ、他者とかがわり、知識を活用して課題を解決する活動をもっと取り入れるべきではないでしょうか。私は、学び合いがその活動に適すると考えています。

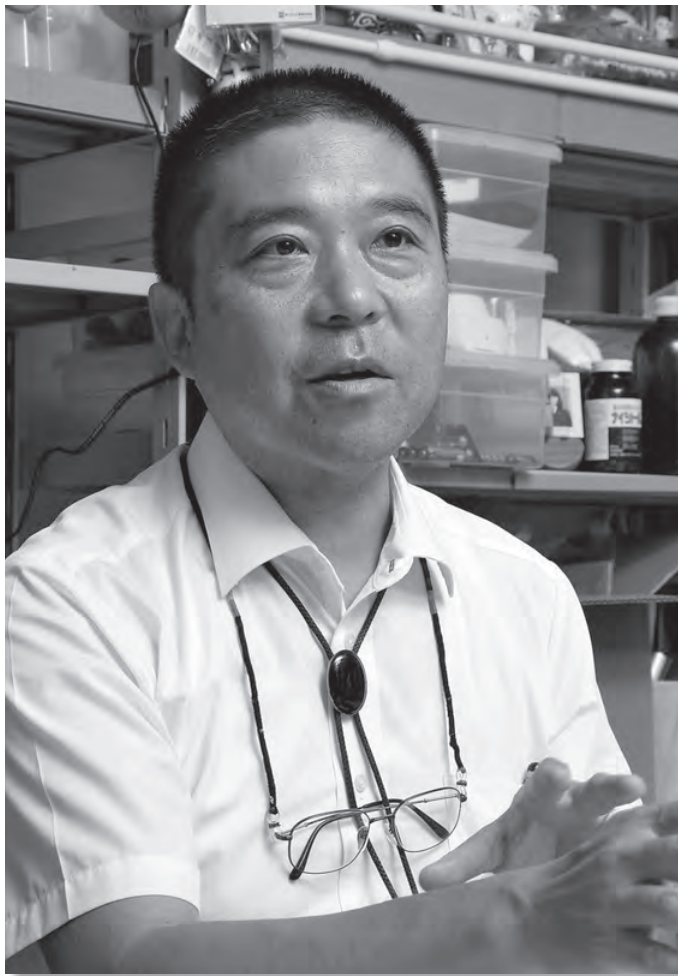
教科学力の差にかかわらず 自ら学びに向かうようになる

学び合いは、教師が教科の内容を説明し、

生徒がそれを聞く授業スタイルの対極に位置します。教師が教え込むのではなく、教師が提示した課題に対して生徒が自由にグループをつくり、互いに学び合うのです。分らないところも、生徒同士が相談して解決します。

学力下位層の生徒は、必ずしも教科内容に関心がないわけではありません。基本的な用語や言葉の意味の理解が不十分であるため、授業に参加したくても出来ないことが多いのです。学び合いでは、友だちと話し合っていく中で、ちょっとした疑問を気兼ねなく質問できます。更に、一人の友だちの説明で分からなければ、別の友だちに尋ねるといよう

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—



にしかわ・じゅん◎筑波大学院教育研究科教科教育専攻修士課程修了。博士(学校教育学)。物理科教師として東京都立高校に勤務後、上越教育大で研究者の道に進む。2002年より現職。「学び合い」を広げるため、講演や執筆活動を行っている。著書に「『学び合い』スタートブック」(学陽書房)など多数。
※なお本文では、学び合いで表現を統一しています

に、何通りもの説明を聞けるのです。説明の仕方は生徒によってさまざまですから、どの生徒も、自分にとって分かりやすい説明を見付けられるでしょう。

少しでも理解できれば、これまで出来なかった生徒は学ぶ楽しさを実感します。最初は正解だけを教えてもらい、しかもその意味が分からず放っておいた生徒が、学習意欲が高まるにつれて、「自分が分からないのはどこか」「どう分からないのか」を説明した上で解き方を尋ねるようになります。

そうした質問の数は次第に増えていき、無意識のうちに教科の本質を捉えた質問が現れ

ることがあります。例えば数学の正負の数で、「移項すると、なぜプラスだった数がマイナスになるのか」といった質問が出ると、上位層の生徒でも、言葉に詰まってしまいます。

移項とはどういうことを理解していなければ、答えられないからです。単に解き方を覚えていた生徒にとっては、全く予想しない質問でしょう。生徒自身の知的好奇心や、質問してきた友だちへの疑問に答えたいこの思いから、既習の知識を組み合わせて真剣に考えたり、家で調べてくる生徒も出てきます。

このように理解度が異なる生徒同士が交流することで、全ての生徒の知的好奇心や探究

心が刺激されるのです。

**目標の工夫で
学習意欲は更に高まる**

生徒が主体となり、生徒同士が学習意欲を高め合う授業を行うために、教師は何をすれば良いでしょうか。

まず重要なのは、授業冒頭に示す「本時の目標」です。ポイントは次のようにまとめられます(P.8図)。

■具体的に分かりやすく設定

例えば数学の授業なら、「三角形の合同条件を説明できる」とするのではなく、「合同条件をいくつ説明するのか」を示しましょう。そうすれば、生徒はその問いで何を求められているのかを理解できます。

「いくつ」が示されないと、一つ説明できれば良いと考える生徒も、三つ以上説明できなければいけないと考える生徒もいるというように、各自が達成の難易度の異なる目標に向かって取り組むことになってしまいます。これでは生徒同士の会話が噛み合いませんし、学習意欲も上がりにくいと思います。

■教科によって目標を工夫

例えば理科は、「…について観察・実験の結果を使って、なぜろうそくの炎が燃え続けるのかを説明できる」と、具体的な目標を立てやすい教科です。おのずと生徒の答えも明確になることが期待されます。そこで、答え

図 西川先生が指摘する、目標設定のポイント

- 教師だけでなく、子どもが評価できる表現になっているか（「分かる」「知る」「感じる」などの言葉は避ける）
- 具体的なゴールになっているか（三角形の合同条件を一つ見付ければ達成なのか、二つ以上見付けて達成なのか）
- インプットしたものをアウトプット（表現）させるものになっているか
- 相手（聞き手）を意識させる（言いつ放しにさせない）ようになっているか
- 削って削ってシャープになっているか

だけでなく、答えを導く過程を説明できるところまでを目標にすると良いでしょう。

国語のように、文章の解釈によって複数の答えが成り立つ教科では、「…についてなぜそのように考えるようになったのか、理由とともに他の人にもよく分かるように自分の考えを説明できる」といった目標設定が有効です。単に「自分はこう思う」と言うのではなく、他者に対して説得力のある説明が求められるわけですから、生徒はそれだけ文章を注意深く読むようになるでしょう。

■全員での達成を目指す

全ての目標に「全員で課題が出来るようになること」を掲げましょう。あえて自分一人

の力だけでは達成できない目標を示すことで、生徒の交流を促すのです。

自立した学習集団を目指して 目標を語り続ける

「全員での達成」を目標とすることで、教師も「生徒を一人も見捨てない」と強く意識するようになります。その思いは、常に生徒に伝えていただきたいと思います。「一人でも課題が解けない生徒がいる以上、目標を達成したことにはならない」とクラス全体に語り続けるのです。

もちろん、教師の言葉で生徒全員が動くわけではありません。「自分だけが解ければいい」と思っていたり、「課題なんて解けなくてもいい」と諦めたりしている生徒もいるでしょう。しかし中には、教師の言葉に共感し、学び合いを進める生徒もいます。先生方には、一人でも多くの生徒の心に訴えられるような言葉を磨いていただきたいと思えます。

すぐに全員を変えようと考えがちですが、教師が特定の生徒に介入してしまつては、生徒の「自ら他者とかかわる力」を伸ばせません。全ての生徒を信じて待つことが大切です。少しずつ、目標に向かって生徒の気持ちがある、互いに力を合わせる集団となつていきます。

学び合いを目指すのは、教科指導を通して自立した学習集団、いわば健全な学級をつくることなのです。生徒が一つにまとまれば、怖いものではありません。学力向上でも生活習慣改善でも、生徒同士が協力し、自力で実現するようになります。

生徒一人ひとりも、異なる価値観や考えを柔軟に受け入れて、自分の意見を鍛え、さまざまな人と交流する力を身に付けます。そして、その交流を通して互いの結び付きが強まり、集団としていかに大きな力が生まれるかを身をもって感じると思えます。まさに「生きる力」の育成と言えるでしょう。

西川先生が重視する学び合いのポイント

学び合いに最も重要なものは、生徒を信じる教師の気持ちです。そして学び合いは、「大多数の生徒が出来るようになること」ではなく、「全ての生徒が出来るようになること」を目指しています。

実現には、我慢や根気が必要でしょう。しかし諦めずに、その目標がいかに尊いかを生徒に語り続けなければなりません。教師は、生徒の将来を預かっているのです。「目の前の生徒たちを一人も見捨てず、全員を幸福にする」。そうした信念を持って指導に当たることが大切だと思います。

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—

西川先生の学び合い実践

Q & A

Q 学び合いでは、教師が生徒一人ひとりの学習を丁寧に見取ることが出来ないと思います。生徒が本当に教科内容を理解できるのでしょうか。

A 私は、50分の授業時間内に一人の教師がクラスの生徒一人ひとりの学習を見取ること自体が難しいと考えています。理解度は、生徒の数だけ異なるからです。学び合いで教師が見取るのは、生徒一人ひとりではありません。「全員での課題達成」を目標とし、生徒がどのような話し合いをしているか、「集団の様子」を見取ります。

集団が学習内容をしっかり理解しているかを見取る指標は、授業の最後に行う確認テストや定期考査の最低点です。成績中・上位層の生徒の得点が大きく影響する平均点と違い、最低点は、成績下位層の生徒が学習内容を理解しなければ上がりません。だからこそ、理解不十分な生徒が一人も出ないよう「全員での課題達成」を目標とします。

Q 教師が介入しないで、生徒は本当に学習しますか。友だちの解答を写す生徒もいるのではないのでしょうか。

A 学び合いを始めて間もない段階では、確かに解答を写す生徒がいるでしょう。分らないことが恥ずかしいからです。

しかし私がかかわってきた学校では、学び合いが進み、学習意欲が高まる生徒が増えるにつれて、授業内容を十分に理解できない生徒の存在を、他人事としない雰囲気生まれてきました。生徒は誰でも、勉強が出来るようになりたいと思っています。解答を写しても自分の学力にならないことは、その生徒自身がよく知っています。

教師が「解答を写すな」と言うのは簡単ですが、生徒は教師に隠して写すようになるだけで、本質的には解決しません。全員で学びに向かおうとする集団が出来てくると、誰もが解答を写そうと思わなくなるでしょう。

Q 自由に交流させると、孤立する生徒が出てくると思います。それでも良いのでしょうか。

A 学び合いだから生徒が孤立したのではなく、孤立が顕在化したに過ぎませぬ。その生徒は、学び合いを始める前からそういう状況に置かれていたのです。

生徒の孤立を目的にしたりする先生方のつらい気持ちは、よく分かります。しかし、教師が生徒に個別に指導し過ぎると、他の生徒は「先生が担当するんだ」と思います。そして、その生徒は他の生徒とますますつながれなくなってしまう。教師はいつまでも生

徒に手を差し伸べられません。将来を思えばこそ、生徒が自分の力で解決できるように指導すべきではないでしょうか。

大切なのは、この問題をクラス全体の問題として捉えることです。孤立している生徒に原因を求めるのではなく、「全員が分かる」「全員が授業に参加する」という目標を達成していないクラス全体に対して、「それでいいの」と強く語り続ける必要があります。

もちろん、孤立しかねない生徒がいる場合は、学び合いを始める前に、その生徒の保護者と話す機会を設けるなど、理解を得る努力をした方が良いと思います。先生ご自身がどういうねらいを持って学び合いに取り組んでいるかが問われる場面です。

Q 生徒中心の授業スタイルに対して、保護者は不安になると思います。不安を解消するにはどうしたら良いでしょうか。

A 学校に関して、保護者の最大の情報源は生徒です。生徒が学び合いに面白さを感じれば家庭で話す感想も充実し、保護者の不安はおのずと減ると思います。そのためには、授業参観などの機会に実際の学び合いの様子を見てもらうことも重要です。

学び合いが進んで学力が底上げされることも保護者の理解につながりますが、これはあくまでも結果です。まずは、生徒にとって充実した取り組みになるよう努めることが大切だと思います。